

初期仏教に見る「ことば」の諸相 ⑤

論争の超越

パーリ語原始仏典に見る釈迦の「ことば」からは、無用な論争をあえて避けようとする釈迦の姿勢がうかがえる。特に前回で指摘した通り、バラモン教への直接的な非難や排斥はあまり見受けられない。

修行僧らよ、われは世間と争わず。されど世間がわれと争う。法を語る人は、世間の何人とも争わず。世間の諸の賢者が「無し」と承認したことを、われもまた「無し」と語る。世間の諸の賢者が「有り」と承認したことを、われもまた「有り」と語る。(中略) 修行僧らよ、例えば青蓮華、または紅蓮、または白蓮が水のうちに生じ、水の中で成長し、水から上に現れて出て、しかも水に汚されていないように、修行僧らよ、実に如来は世間の中で成長し、世間にうちかっているが、しかも世間に汚されないのである。(中村、1960: 34-36)

釈迦はこのように弟子たちに語り、バラモンやその他の思想家との不毛な論争を自らも避け、また弟子たちにもそのように教示していた。

また釈迦は、弟子たちの問いのなかでも形而上学的なものや無意義なものに関しては言及を避けたという。これを「アヴァークタ(無記)」という。釈迦の教えに関し、その要諦を説明解的に示したものが集められている「マジマ・ニカーヤ(中部経典)」の第63経には、毒矢の喩を用いてこの「無記」に関する論及がみられる。弟子のマルンキヤブッタが釈迦に次のような質問をした。1) 世界は時間的に永遠か否か、2) 世界は空間的に有限か無限か、3) 生命と身体とは同一か否か、4) 如来は死後存在するか否か。これらの命題に対して釈迦が回答しなければ自分は還俗すると言い出すと、釈迦はそれらには一切答えず、次の「毒矢の喩」をもって論じたという。

マルンキヤブッタよ、たとえばある人が毒を厚く塗った矢で射られたとしよう。彼の友人や同僚や親戚の者たちが内科医や外科医に手当てをさせようとしたとしよう。

もし彼が、「わたしを射た者がクシャトリヤ階級の者か、バラモン階級の者か、ヴァイシャ階級の者か、シュードラ階級の者かが知られないうちは、私はこの矢を抜かない」といったら、またもし彼が、「わたしを射た者の名前はこれこれであり、姓はこれこれであると知られないうちは、私はこの矢を抜かない」といったら、またもし彼が、「わたしを射た者は背が高いか背が低いか中くらいか知られないうちは、わたしはこの矢を抜かない」といったら、またもし彼が、「わたしを射た者は黒いか褐色か金色の肌をしているかが知られないうちは、私はこの矢を抜かない」といったら、(中略) マルンキヤブッタよ、その者はそれを知らないうちに死んでしまうであろう。

マルンキヤブッタよ、これとまったく同様に、「世界は永遠である」とか「世界は永遠でない」とか、「世界は有限である」とか「世界は無限である」とか、「生命と身体は同一である」とか「生命と身体は別異である」とか、(中略) 世尊がわたしに説かないうちは、わたしは世尊のもとで清らかな行いを実践しないという人がおれば、マルンキヤブッタよ、世尊によって説かれないままに、その人は死んでしまうであろう。(中略) マルンキヤブッタよ、なにゆえに私はこのことを説かなかったのか。マルンキヤブッタよ、なぜならこのことは目的にか

なわず、清らかな行ないの基礎とならず、世俗的なものを厭離すること、情欲から離れること、煩惱を消滅すること、こころの平静、すぐれた智慧、正しいさと、涅槃のために役に立たない。それゆえわたしはそれを説かなかったのである。(中村、2009: 309)

このように釈迦はマルンキヤブッタに論じた。世界が永遠であろうとなかろうと、それらがどうであろうと、現実には人々の人生において、生・老・死、悲しみ・嘆き・苦しみ・憂い・悩みが存在している。それらの根本的な解決のために現実的かつ実践的な教えを説くことの大切さを、上述の毒矢の喩によって釈迦は論じたという。彼は世の人々の苦しみを解決するうえで無用ともいえる論争を避けつつ、苦悩の根本的な解決に役立つことのみを説き、それに有用ではないと思われる事象に関しては一貫して沈黙を守った。

このような釈迦の教えからは、二律背反や二項対立といった構図を超えて、物事の本質を省察し、あるがままの道理を悟ることに神経を研ぎ澄ます彼の姿勢がうかがえる。

ここ(わが説)にのみ清浄があると説き、他の諸々の教えには清浄がないと言う。このように一般の諸々の異説の徒ははざまに執着し、かの自分の道を堅くたもって論ずる。

自分の道を堅くたもって論じているが、ここに他の何びとを愚者であるとすることができようぞ。他(の説)を、「愚かである」、「不浄の教えである」、と説くならば、彼はみずから確執をもたらすであろう。

一方的に決定した立場に立ってみずから考え量りつつ、さらに彼は世の中で論争をなすに至る。一切の(哲学的)断定を捨てたならば、人は世の中で確執を起こすことがない。(中村、1986: 195)

様々な論争や思想的軋轢の超越とその桎梏からの解放を、聖なる沈黙によって希求した釈迦の態度は、当時のインド社会において精彩を放った。

釈迦は、様々な哲学や思想に対抗するような新たな観念的地平を開拓したわけでもなく、それまでの伝統を覆すような思想的転換を模索するために新たな宗教をひらいたわけでもなかった。また教団の長として権威主義的な組織を構築したわけでもなかった。むしろ、インド諸哲学派が論争に明け暮れ、形而上学的な命題の追求に没頭し、最終的には二律背反に陥ってしまっていた状況の中で、ひたすら精神的安寧と現実的苦悩の克服、そしてその実践を、一人の出家者として45年間にわたり身をもって世の人々に示した。

他の宗教や伝統、思想に対する寛容な釈迦の姿勢は、そのまま仏教における宥和的な特徴へと発展し受け継がれていったように見受けられる。そしてそれが他の地域や文化圏において柔軟に変容しつつ、仏教として広く受容される要因ともなった。しかし、逆にインドにおいては、そのような特徴によって仏教そのものの輪郭が不明瞭となり、それがバラモン教に基づくヒンドゥー的宗教伝統に自らをも埋没させる要因ともなった。そしてインドにおいて仏教は、次第にヒンドゥー教に吸収され、最終的には消滅するに至る。

[引用文献]

中村元監修『原始仏典第五巻中部経典II』春秋社、2009年第2刷。
中村元『釈尊のことば』春秋社、1960年第2刷。
中村元訳『ブッタのことば スッタニパータ』岩波書店、1986年第5刷。